

基準 14 不活性ガス消火設備の設置及び維持に関する基準

第1 法令等に定める技術上の基準によるほか、次に定めるところによる。

1 全域放出方式の不活性ガス消火設備は、次によること。

(1) 不活性ガス消火設備の貯蔵容器(以下この基準において「貯蔵容器」という。)の設置場所は、次によること。

ア 二酸化炭素を放射するものにあつては、防護区画及び防護区画に隣接する部分(以下この基準において「防護区画等」という。)を通ることなく出入りすることができること。ただし、防護区画に隣接する部分については、防護区画と防護区画に隣接する部分を区画する壁、柱、床又は天井に開口部が存する場合に限る(以下この基準において同じ)。◇

イ 窒素、I G-541 又は I G-55 を放射するものにあつては、防護区画を通ることなく出入りすることができること。◇

ウ 不燃材料で造られた壁、柱、床又は天井(天井のない場合にあつては、屋根)で区画され、開口部に防火戸を設けた専用の室に設けること。

エ 地階に設けるものは、機械換気設備とすること。◇

オ 貯蔵容器の設置場所に設ける当該消火設備の貯蔵容器の設置場所である旨の表示は基準 34 によること。◇

(2) 貯蔵容器は、高圧ガス保安法に適合するものであること。

(3) 選択弁は、次によること。

ア 貯蔵容器と同一の場所又は火災の際容易に接近することができ、かつ、人がみだりに出入りしない場所に設けること。

イ ガス圧開放方式又は電氣的開放方式により迅速かつ確実に開放することができ、手動でも開放することができる構造のものであること。

(4) 容器弁の開放装置は、次によること。

ア 容器弁の開放装置は、手動でも開放することができる構造のものであること。

イ 電磁開放装置を用いて直接容器弁を開放する容器弁の開放装置は、同時に開放する貯蔵容器の数が7以上のものは、当該貯蔵容器に2以上の電磁開放装置を設けること。◇

(5) 配管等については、次によること。◇

ア 起動用ガス容器と貯蔵容器を接続する操作管には、起動用ガス容器内のガスの漏洩により貯蔵容器が開放しないよう誤作動防止のための逃がし弁(起動用ガス容器内のガス漏洩時の低圧では開放して操作管内の圧力上昇を防止し、起動用ガス容器開放時の高圧では閉止する機能を有する弁をいう。以下同じ。)を設けること。ただし、当該不活性ガス消火設備のシステムにおいて、操作管への逃がし弁の設置以外の方法により操作管内の圧力上昇による誤作動を防止するための措置が講じられている場合は、この限りではない。なお、逃がし弁の基準については、「二酸化炭素消火設備の設置に係るガイドラインの策定について」(令和4年11月24日付け消防予第573号)に定めるとおりとする。◇

イ 閉止弁は、規則第 19 条第 5 項第 19 号イ(ハ)により、「不活性ガス消火設備等の閉止弁の基準」(令和 4 年消防庁告示第 8 号)に適合するものを設置するほか、閉止弁の閉止状態を作業員等が十分判別できるよう、操作箱に点滅する表示灯を設け、かつ、受信機又は制御盤にも点滅する表示灯を設けること。なお、表示灯による点滅表示ができない場合は、作業員等が閉止弁の閉止状態を判別するための警報音を付加すること。◇

ウ 閉止弁は、安全センターの認定品とすること。◇

(6) 防護区画等及び防護区画等以外で、防護区画に隣接する部分を経由しなければ避難することができない室の構造等は、次によること(図 14-1 参照)。

ア 防護区画の構造等は、次によること。

(ア) 窒素、I G-541 又は I G-55 を放射する防護区画には、式 14-1 により求めた開口面積の避圧口を設置すること。

式 14-1

$$A=134 \times Q / \sqrt{P - \Delta P}$$

A : 避圧口面積 (cm²)

Q : 噴射ヘッドからの最大流量 (m³/分)

P : 防護区画内の許容圧力 (Pa)

ΔP : ダクト等の圧力損失 (Pa)

(イ) 防護区画の開口部は、階段室、非常用エレベーターの乗降ロビーその他これらに類する場所に面して設けないこと。☆

(ロ) 防護区画は、2 以上の室にまたがらないこと。ただし、通信機器室及び電子計算機器室の附室等で、次のすべてに該当するものは、同一の防護区画として取り扱うことができる。◇

a 他の消火設備の設置又は有効範囲内の部分とすることが、構造上困難であること。

b 廊下、休憩室等の用に供されていないこと。

c 主たる部分と同一の防護区画とすることに、構造及び機能からして妥当性があること。

(ハ) 防護区画内には、避難経路を明示することができるよう誘導灯を設けること。ただし、非常照明が設置されているなど十分な照明が確保されている場合にあっては、誘導標識によることができる。◇

(ニ) 防護区画に設ける出入口の扉は、当該防護区画の内側から外側に開放される構造のものとするとともに、ガス放出による室内圧の上昇により容易に開放しない自動閉鎖装置付きのものとすること。

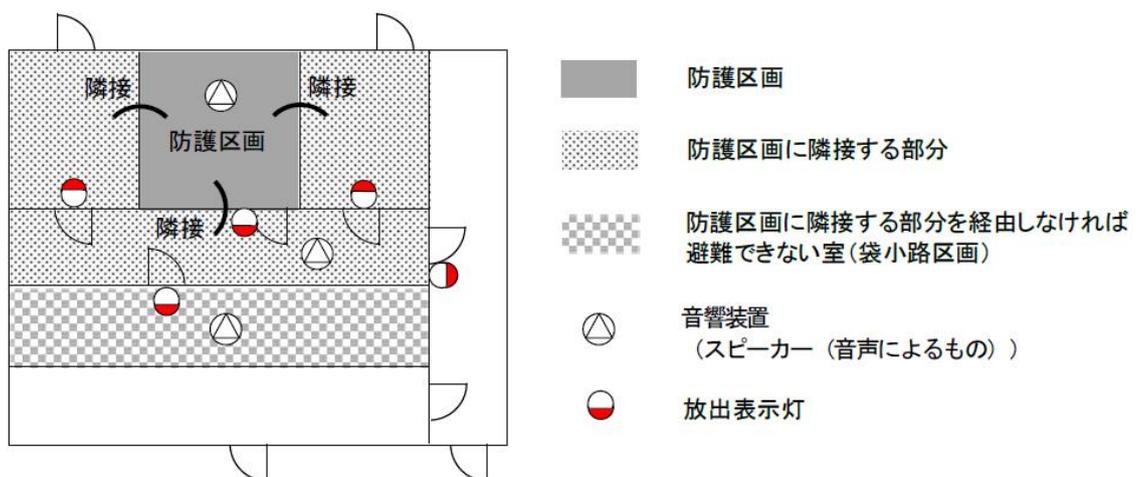
(ホ) 防護区画の自動閉鎖装置にガス圧を用いる場合は、起動用ガス容器のガスを用いないこと。◇

(ヘ) 開口部にガラスを用いる場合は、網入りガラス、線入りガラス又はこれらと同等以上の強度を有するものとすること。◇

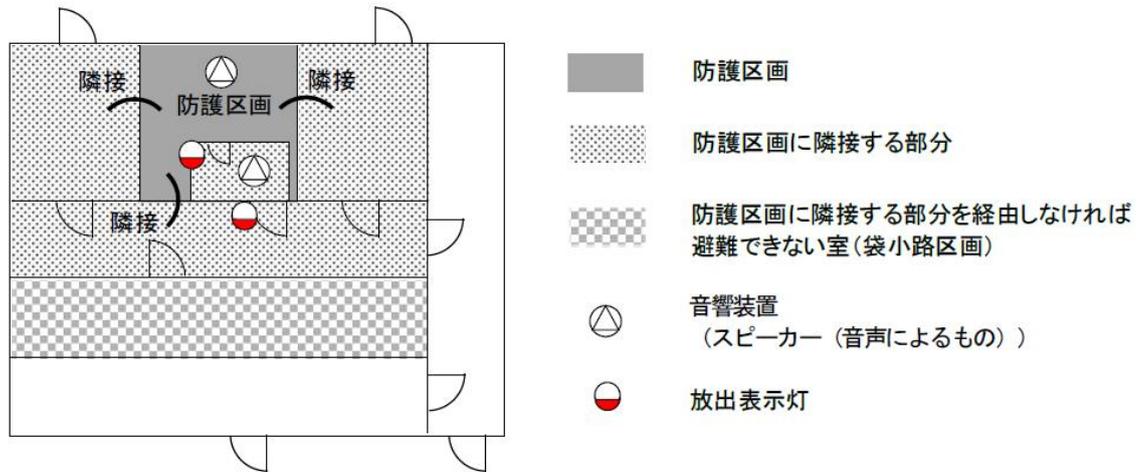
(ロ) 防護区画は、次によること。◇

- a 防護区画には、有効に二方向避難ができるように2以上の出入口が設けられていること。
ただし、防護区画の各部分から避難口の位置が容易に確認でき、かつ、当該防火区画内の各部分から出入口までの歩行距離が20m以下である場合にあっては、この限りではない。
- b 地階の防護区画の面積は、400 m²以下とすること。ただし、防火対象物の地階の階数が1である場合で、防護区画に接してドライエリア等避難上有効な部分が設けられている場合は、この限りではない。
- (ケ) タワー方式の立体駐車場の開口部は、消火剤の放出前に、又は放出と同時に自動的に閉鎖させることとし、開口部に対する消火薬剤の付加はしないものとする。◇
- (ク) 防護区画を構成する区画壁は、消火剤が漏洩するおそれがない構造とすること。特に、ALCパネル、押出成形セメント板等の工場生産された規格部材等による施工方法を用いたものにあっては、モルタル塗り等による仕上げ、目地部分へのシーリング材等の充てんその他の必要な漏洩防止対策を講じること。◇
- イ 二酸化炭素を放射する防護区画に隣接する部分の構造は、ア、(エ)によるほか、次によること。
 - (ア) 当該部分に設ける出入口の扉(当該防護区画に面するもの以外のものであって、通常の出入り又は退避経路として使用されるものに限る。)は、当該部分の内側から外側に容易に開放される構造のものとする。☆
 - (イ) 当該部分には、防護区画から漏洩した二酸化炭素が滞留するおそれのある地下室、ピット等の窪地が設けられていないこと。
- ウ 防護区画等以外で、二酸化炭素を放射する防護区画に隣接する部分を経由しなければ避難することができない室には、消火剤が防護区画内に放射される旨を有効に報知できる音響警報装置を規則第19条第5項第17号の例により設けること。◇

〈消火剤が二酸化炭素の場合〉



〈消火剤が二酸化炭素で前室を設けた場合の一例〉



〈二酸化炭素以外の消火剤の場合〉

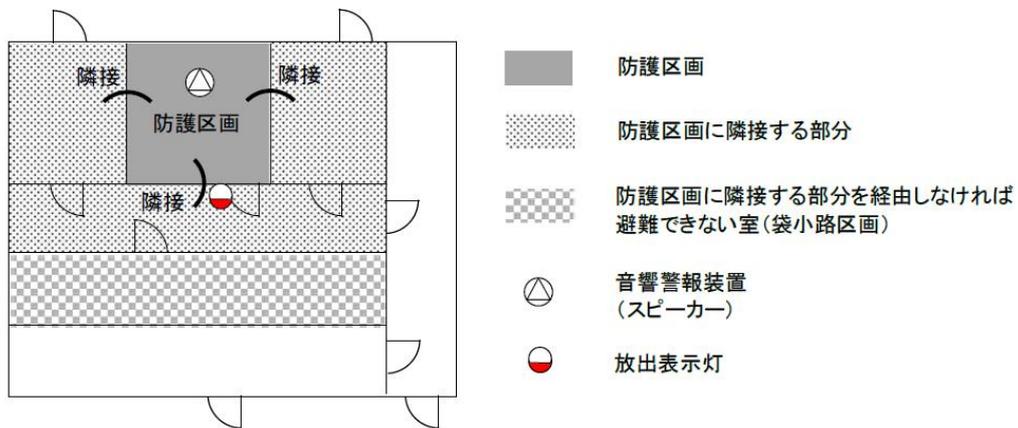


図 14-1

エ 規則第 19 条第 5 項第 19 号の 2 ただし書の取扱いは、次によること。

(ア) 防護区画に隣接する部分が、直接外気に開放されている場合又は外部の気流が流通する場合

(イ) 防護区画に隣接する部分の体積が、防護区画の体積の 3 倍以上である場合(防護区画等の規模・構造等から判断して、当該防護区画に隣接する部分に存する人が、高濃度の二酸化炭素を吸入するおそれのある場合を除く。)

(ウ) 漏洩した二酸化炭素が滞留し人命に危険を及ぼすおそれがない場合

(7) 制御盤は、次によること。

ア 貯蔵容器と同一の場所に設置し、操作に支障がない程度の照度を有する非常用の照明装置を設けること。◇

イ 制御盤付近に次の図書を備え付けること。☆

(ア) 機器構成図

- (イ) 系統図
- (ウ) 防護区画及び貯蔵容器を貯蔵する場所の平面図
- (エ) 閉止弁の開閉操作手順及び手動切換え装置の操作手順を記した図書(図 14-2 参照)

点検時等の実施事項	
1	防護区画内で点検等を行う場合は、 消防設備士等有資格者の立会いを求めること。
2	防護区画内に立ち入る場合は、 閉止弁を閉止すること。 〔閉止手順〕
3	防護区画内に立ち入る場合は、 自動手動切替え装置を手動とすること。 〔切替え手順〕
4	消火剤が放射された場合は、 消火剤が排出されるまでの間、防護区画内に立ち 入らないこと。
5	点検等が終了すれば、 閉止弁及び自動手動切換え装置を復元すること。
※ 設備の構造に関する図書は () に有り	

図 14-2 (エ)の図書の一例

(8) 火災表示盤は、次によること。ただし、自動火災報知設備の受信機等で、火災表示盤の機能を有するものにあつては、火災表示盤を設けないことができる。◇

ア 制御盤からの信号を受信し、次の(ア)から(カ)までに掲げる装置を作動させること。

- (ア) 各防護区画ごとの感知器の作動を明示する表示灯
- (イ) 放出起動の作動を明示する表示灯
- (ウ) 消火剤の放出を明示する表示灯
- (エ) 起動回路異常(地絡又は短絡)を表示する表示灯
- (オ) 閉止弁の閉止状態を表示する表示灯
- (カ) 起動方式が自動式のものには、自動及び手動を明示する表示灯

イ 火災表示盤は、点検に便利で、かつ、火災による影響、振動、衝撃又は腐食のおそれのない場所に設けるほか、次によること。

- (ア) 防災センター等に設けること。
- (イ) 防護区画図を備えること。

(9) 起動装置は、次によること

ア 起動装置が設けられている場所は、起動装置及び表示が容易に識別できる明るさを確保すること。

イ 起動装置は、照明スイッチ、非常ベル等他の設備の操作とまぎらわしい操作方法を避け、消火

のために意識して操作しなければ起動することができない機構とすること。

ウ 手動起動装置又はその直近の箇所に表示する保安上の注意事項は、次に掲げる内容とすること。

(ア) 火災又は点検のとき以外には、当該手動装置に絶対に手を触れてはならないこと。

(イ) 不活性ガス消火設備を起動した後、速やかに安全な場所へ退避することが必要であること（消火剤が流入するおそれがない場合又は保安上の危険性がない場合を除く。）。

エ 手動起動装置（操作箱）は、安全センターの評定品とすること。◇

オ 自動式の起動装置は、次によること。

(ア) 起動方式は、AND回路制御方式とし、次のいずれかとすること。

a 異なる種別で、かつ、複数の不活性ガス消火設備専用の感知器からの信号による起動とすること。

b 1の火災信号は自動火災報知設備とし、他の火災信号は不活性ガス消火設備専用の感知器からの信号による起動で、かつ、異なる種別の感知器とすること。

(イ) 熱式の感知器は、特種、1種又は2種のもを規則第23条第4項の規定の例により設けることとし、次のいずれかに掲げる場合については、3種（空気管式に限る。）とすることができる。

ただし、当該熱式の感知器では非火災報の発生が容易に予想される場合又は火災感知が著しく遅れることが予想される場合は、この限りでない。◇

a 消火設備と常時連動している自動火災報知設備の感知器

b 不活性ガス消火設備専用の感知器

(ウ) 不活性ガス消火設備専用の感知器は、防護区画ごとに警戒区域を設けること。

(エ) 自動起動方式である旨の注意文章を自動火災報知設備の受信機及び二酸化炭素消火設備の制御盤に表示すること（図14-3参照）。◇

〈制御盤への表示例〉

 危険	試験の注意事項
	<ul style="list-style-type: none">・この制御盤は、自動火災報知設備の受信機の火災感知回路と連動しています。・火災感知回路の連動試験を行うときは、自動火災報知設備の関係者と連携して試験すること。

〈自動火災報知設備の受信機への表示例〉

 危険	試験の注意事項
	<ul style="list-style-type: none">・この受信機は、二酸化炭素消火設備と連動しています。・火災試験等を行うときは、防火管理者等の立会いの上、二酸化炭素消火設備の制御盤の自動・手動切換スイッチを操作して手動の状態にして、試験すること。

図14-3

(ウ) 自動起動方式の二酸化炭素消火設備に設ける手動式の起動装置は、二酸化炭素消火設備起動用の感知器の作動と手動式の起動装置の作動で放出するものとする。◇

(10) 遅延装置は次によること。◇

ア 遅延時間は、規則第 19 条第 5 項第 19 号イ(イ)の規定によるほか、退避時の歩行速度等、各部分の条件を考慮し、十分な遅延時間を設定すること。

イ 遅延時間は、次の(ア)又は(イ)のいずれか小さい方の時間により算出すること。

(ア) 次の計算式により算出する遅延時間

式 14-1

$$t = \left(\frac{l_{room}}{v} + t_{start} \right) \times 1.5$$

{	t : 遅延時間 (単位 秒)
	l_{room} : 当該居室等の最遠部分から当該居室の出口の一に至る歩行距離 (単位 m)
	v : 歩行速度 = 1 m/秒
	t_{start} : 避難開始時間 = 15 秒 (駐車のために供される部分にあつては 30 秒)

(イ) 次の計算式により算出する最大遅延時間

式 14-2

(手動起動の場合)

$$t_{max} = 150 - \left(\left(\frac{l_{room}}{v} \right) \times 1.5 \right)$$

(自動起動の場合)

$$t_{max} = 90$$

{	t_{max} : 最大遅延時間 (単位 秒)
	l_{room} : 当該居室等の最遠部分から当該居室の出口の一に至る歩行距離 (単位 m)
	v : 歩行速度 = 1 m/秒

ウ イ(ア)により算出した時間が、イ(イ)の最大遅延時間を超える区画にあつては、当該区画に二酸化炭素消火設備を設置することが望ましくないことから、次のいずれかの対応をとること。◇

(ア) 二酸化炭素消火設備以外の消火設備の設置

(イ) イ(ア)により算出する時間が最大遅延時間を超えないような区画の大きさへの変更

(11) 防護区画等に設置する音響警報装置は、次によること。

ア 防護区画に係る警報と防護区画に隣接する部分に係る警報は、同一の内容とすることができること。◇

イ 他の警報音又は騒音と明らかに区別して聞き取ることができるように措置すること。◇

ウ 音響警報装置は、音声による警報装置とすること。

- なお、音声による警報装置のみでは、効果が期待できないと認められる場合は、赤色の回転灯を附置すること。
- エ スピーカーは、当該防護区画の各部分からの1のスピーカーまでの水平距離が25m以下となるように、反響等を考慮して設けること。
- 12 防護区画等で放出された消火剤を屋外の安全な場所に排出するための措置(以下この基準において「排出措置」という。)は、次のいずれかによること。
- ア 自然排気による排出措置は、次によること。
- (ア) 自然排気の開口部は、外気に面する窓その他の開口部(防護区画の床面からの高さが階高の2/3以下の位置にあるものに限る。)で、当該防護区画外から容易に開放することができるものであること。
- (イ) 自然排気の開口部面積の合計は、当該防護区画の床面積の10%以上であること。
- イ 機械排気による排出措置は、次によること。ただし、防護区画に隣接する部分は、放出された消火剤を1時間あたり1回以上換気することができるものであること。◇
- (ア) 排出装置は、原則として専用のものであること。ただし、防護区画等から排出した消火剤が他室に漏えいしない構造のものにあっては、この限りでない。◇
- (イ) 防護区画に係る排出装置と当該防護区画に隣接する部分に係る排出装置は、兼用することができる。◇
- (ウ) 排出装置の操作部は、防護区画等を経由せずに到達できる場所に設け、当該防護区画外から容易に操作することができるものであること。◇
- (エ) 排出装置の排出ファンの容量は、1時間あたり5回以上換気できるものであること。◇
- (オ) 排出装置及び復旧操作を要する自動閉鎖装置の操作部は、防護区画等を経由することなく到達することができる場所に設け、その直近の見やすい箇所に当該装置である旨を表示した標識を設けること。
- (カ) 排出装置及び復旧操作を要する自動閉鎖装置の操作に支障がない照度を有する非常用の照明装置を設けること。◇
- (キ) 排出装置には非常電源を附置し、配線は耐火配線とすること。
- (ク) 排出装置の排出口は屋上等の安全な場所に消火剤を排出させること。
- 13 保安のための措置は、次によること。◇
- ア 避難誘導及び人命救助に必要な空気呼吸器(内容積が2ℓ以上のもの)は、1個以上設けるものとし、防災センター等に常備しておくこと。
- イ アの空気呼吸器は、火災避難用保護具(自給式呼吸保護具に限る。)としての安全センターの評定品であること。
- 14 消火剤が放出された旨を表示する表示灯(以下この基準において「放出表示灯」という。)は、次によること。◇
- ア 防護区画等に係る放出表示灯は、同一の仕様のものとするができる。
- イ 放出表示灯は、防護区画等の出入口等のうち、通常の出入り又は退避経路として使用される出

入口の見やすい箇所に設けること。

ウ 放出表示灯の点灯のみでは、十分に注意喚起が行えないと認められる場合は、放出表示灯の点滅、赤色回転灯の附置等の措置を講じること。◇

(15) 非常電源、配線等は、基準 33 によるほか、非常電源の容量は、次に掲げる動作を有効に 1 時間作動することができる容量以上とすること。

ア 貯蔵容器(低圧式のものに限る。)を低温度に保持すること。

イ 不活性ガス消火設備を起動させること。

ウ 消火剤が放出された旨を表示すること。

エ 放出された消火剤を安全な場所へ排出すること。

(16) 防護区画等に設ける標識、注意銘板等は基準 34 によること。

2 局所放出方式の不活性ガス消火設備は、前項(第 6 号、第 10 号、第 11 号、第 13 号及び第 14 号を除く。)の規定の例によるほか、次によること。

(1) 駐車用の用に供される部分及び通信機器室以外の部分で、次に掲げる場所に設置することができる。

ア 予想される出火箇所が、特定の部分に限定される場所

イ 全域放出方式又は移動式の不活性ガス消火設備の設置が不相当と認められる場所

(2) 2 以上の防護空間が重複する場合及び接する場合についての放射区域(1 の選択弁により消火剤が放射される区域をいう。以下この基準において同じ。)は、これらを 1 の防護空間と見なして当該防護空間を放射区域とすること。

(3) 防護対象物相互間の距離が 1.2m 以下となる場合(重複する場合及び接する場合を含む。)は、これらを 1 の防護対象物と見なして必要な消火剤の量を算定し、規則第 19 条第 4 項第 3 号の規定を適用すること。

3 移動式の不活性ガス消火設備は、次によること。

(1) 消火設備の箱の上部に設ける赤色の灯火の電源は、規則第 24 条第 1 項第 3 号の規定の例により設置すること。

(2) 標識は基準 34 によること。

第 2 特例適用の運用基準

令第 32 条の規定を適用する場合の基準は、第 1、第 1 項第 12 号(キ)の排出装置の非常電源は、当該防火対象物に自家発電設備が設置されている場合を除き、非常電源専用受電設備とすることができる。◇